

【特別展 角倉素庵展によせて】

〈嵯峨本〉古活字の調査現場から

「嵯峨本を調べる会」主宰
近畿大学芸芸学部講師 森上 修

今秋、当大和文華館において10月5日から11月10日まで「角倉素庵の特別展」が開催されます。

角倉素庵は近世初期の京都の大実業家として広く知られているところですが、一方では藤原惺門の儒学者でもあり、嵯峨の地で大部な中国史書の『史記』をはじめ〈嵯峨本〉と呼ばれるきわめて美麗な書物を数多く刊行して近世初期の出版史上に大きな足跡を残しています。

このたびの企画は、わが国の近世初期文化の諸相を多角的にとらえる上で頗る重要な人物の一人である角倉素庵にスポットをあててその実像に迫り、彼の各方面に果たした役割の解明を試みようというところに視点がおかれていて、この展観には今から大きな期待が寄せられています。

会期中には、奈良教育大学名誉教授 赤井達郎先生の講演「角倉了以とその子素庵」と当館学芸部 林進次長の日曜美術講座「新『嵯峨野明月記』—光悦・宗達・素庵の交友—」があり、またシンポジウムとして「角倉素庵と『嵯峨本』—近世の出版文化を考える—」が予定されています。

今回の展観では、〈嵯峨本〉の代表的なものが出陳されますが、その〈嵯峨本〉は雲母模様を伴う行草体字様の刊本で、多くは木活字版です。

この〈嵯峨本〉の刊行については、これまで芸術家の本阿弥光悦の主導によるものとされてきましたが、近年ではその説が逆転して実は嵯峨の角倉素庵がその地において主体的に取り組んだ古典開版事業の所産ではないかとする見方が有力になってきています。つまり〈嵯峨本〉イコール〈角倉本〉というわけです。

ところで、素庵が嵯峨の地で開版したと考えられる書物には楷書体の眞名活字本と行草体の字様のものがあります。

漢籍に『史記』(130巻)・『春秋経伝集解』(30巻)、国書の『日本書紀』(30巻)は前者の例です。後者が〈嵯峨本〉の一群で、『三十六歌仙』・『二十四孝』などの木版本がありますが、そのほとんどは『徒然草』・『伊勢物語』・『方丈記』・『百人一首』・〈観世流謡曲百番〉などの木活字版です。

これらの木活字版を近世後期の木活字版と区別するために〈嵯峨本〉の古活字版と呼ぶようになっています。

こうした〈嵯峨本〉の古活字版では行草体の平仮名交り文を印刷するのに単字活字と2字～6字の連彫活字をとり混ぜて排植・組版した刷版が用いられます。それにはことに2字・3字の連彫活字が数多く使われています。

これに対して、天正年間の末期(1590年)に九州の地へ伝来した西洋活版印刷方式の〈キリシタン版〉初期平仮名交り鉛活字本では、1字活字の使用が原則で、2字連鏝のものは「玉ふ」・「たる」の二例がごく例外的に存在するだけです。

この点が〈嵯峨本〉の古活字版と〈キリシタン版〉の最初期国字本との大きな違いといえます。

さて、こうした〈嵯峨本〉に関するこれまでの調査・研究のあり方を振り返ってみますと、既存文献の解釈とか〈嵯峨本〉リストの編成をめぐる研究などはあれこれ行われてきましたが、版本個別の使用活字とか植字・組版あるいは版本間の活字異同の確認など印刷技術的な方面の事柄にかかわる実証的な調査・考究はほとんどおざりにされてきたのが実情ではな

いかとおもわれます。

ただし、〈観世流謡曲百番〉の特製本に関しては、『矢卓鴨』(近畿大学中央図書館蔵)、『浮舟』(関西大学総合図書館蔵)、『鵜飼』(大阪樟蔭女子大学図書館蔵)の三帖分について「嵯峨本を調べる会」や「阪神地区私大図書館書誌学研究会」のメンバーによる活字調査が、ここ数年来、精力的に推進されています。従って近い将来、それらの調査結果を集大成した特製本周辺の印行事情が次第に明らかになることでしょう。

なお、私事にわたりますが、かつて近世版本の仮名連綿字様を読み馴れるための簡易な入門教材を作る必要ができて、先の『矢卓鴨』の連彫活字を抽出して「版本を読むための光悦書流字様要覧」を編集したことがあります。

これは今年も便利に使っていますが、それら連彫活字の出現回数は4字が1回、3字22回、2字338回となっています。

そして、先の東大阪市内で活動が続いている「嵯峨本を調べる会」では、この3月ごろから〈嵯峨本〉『徒然草』(第1種)について印出字の調査にとりかかっています。

この『徒然草』は2冊本(上94丁、下77丁、10行)で業余の時間をやりくりしながらの調査ですし、何分にも膨大な作業量になりますので、調査結果のとりまとめには相当な年月がかかってしまいます。

しかし、この半年間の作業期間中にも、新たに知り得た興味深いいくつかの事柄があります。

そこで当館のご厚意に従い、本誌面をお借りして、これまでの調査内容などを概略的に紹介させていただくことにしました。

〈嵯峨本〉古活字版の『徒然草』には5種類の版本があり、その第1種と第2種の両版は雲母刷りの用紙に本文が印出されています。かつて故川瀬一馬博士は『嵯峨本図考』(昭和7年刊)でその第2種本を第1種本の組換え別版であると解説されましたが、近刊の『書誌学入門』(雄松堂出版2001年刊)

では、第1種と第2種の両書は精査したところ同版であり、第2種本はなぜか最初の第1丁だけが異植字であったとしてかつての自説を訂正されました。

この『徒然草』の字様は、他の『伊勢物語』の諸本や『方丈記』・『百人一首』などのいわゆる光悦書流と言われる類のものとはいささか趣きの異なる書風です。

そして、その印字面をバラバラと見たところでは、各丁で連彫活字が多用されているのが目につき、また2冊全体の刷り上り具合もかなり鮮明でまるで木版本のような印象を与えます。

試みに上冊のはじめを詳しくみますと、第1丁だけで5字活字が2回、4字14回、3字連彫活字が34回も現れます。

これら印字様の各々を2冊の全丁にわたって丹念に調べますと、それと全く同じ字様のものが何度か繰り返し出てきますので、これらは間違いなく連彫の活字コマであることがわかります。

現在、奥山春枝氏が昭和9年に発刊された複製本(大阪樟蔭女子大学図書館蔵)の調査資料([表1])ほかを参考に実物印本(天理大学附属天理図書館蔵[図1])を用いてその印出字から連彫活字の全数精査を進めているところです。

【表1】複製本の連彫字調査

連彫字数	字句種	印字回数
7	1	1
6	6	6
5	25	49
4	233	485
3	803	2,783

なお、この奥山氏の複製本は現大東急記念文庫蔵本を用いたもので、影印複製本とされていますが、実際は版下書きを使った精巧な複製本です。

『伊勢物語』をはじめとする他の〈嵯峨本〉の古活字版では4字連彫活字の使用はきわめてまれで1冊中に数例が確認できる程度で

すが、この『徒然草』だけはさらに5字・6字のものを含めて驚くばかりに多くの4字連彫活字が使用されています。

こうした特異な4字～6字の固定化した字句を刻出する連彫活字は他本への活用が限られ、単字の活字を作って幾度も有効活用を繰り返すことを前提とする活字版技法の原理に全く異背するものと言えましょう。

活字印刷に不向きな多字からなる木版的な連彫活字をふんだんに使い、あえて新渡の先端技術である活版印刷方式をとり入れて、厄介な植字・組版の作業に取り組み、書写本の連綿体に近い字様を紙面に展開して美しい印刷本に仕立てた仕事ぶりに感服しますが、少し異様な気がします。

〈嵯峨本〉『伊勢物語』の初版は慶長13(1608)年に刊行されています。

では、この『徒然草』はいつの開版なのかということですが、これには序・跋や刊記もなく印行の事情がよくわかりませんでした。

ところが、先ごろ国立公文書館内閣文庫所蔵の伝嵯峨本『史記』が解体修補された際、表紙の裏張りから嵯峨本『徒然草』(第1種)と同版で雲母刷りを伴わない半丁分の断片が発見されて、重要な事実がわかりました。(竹本幹夫「現存最古の観世流謡版本」『能楽タイムズ』559号平成10年、小秋元段「表紙裏の謡本」『鏡山』502号平成14年)この『史記』の表紙は原装で、その本文中に慶長12年からの書入れがあることから、この『徒然草』(第1種)はそれより以前の刊行とみられ、少なくとも『伊勢物語』の初版本よ

りは先に開版されていたことが明らかにになったわけです。

この『徒然草』(第1種)の素紙の刷り遣れが、角倉素庵の開版にかかわる『史記』の表紙裏から確認されたという事実は『史記』と『徒然草』の両書の摺刷と装訂の作業が同じ工房において行われていたことを示唆しており、この『徒然草』の開版には素庵が確実に関与していたと考えられましょう。

それから、今年5月、「嵯峨本を調べる会」ではコンピュータ技術に詳しい板倉敬則氏が活字の新しい調査方法としてP.C(パーソナル・コンピュータ)を利用した活字の異同識別照合システムの開発に着手され、『徒然草』の4字連彫活字を抽出して、テスト中です。

これは印字情報をP.Cに取り込み、ディスプレイ上で拡大した2コマのサンプル画像を重ね合わせて照合する異同審査法で、実用的に現在かなりの成果があがっており、近くそのシステム概要が発表される予定です。

嵯峨本を印行した連綿行草体の平仮名木活字類の現物は残念ながら伝存していないので、活字の高さやその彫り具合などはよくわかりません。

しかし現存する徳川家康の伏見版木活字や当時の版木類から推測しておそらくそれら木活字の高さは18ミリほどで、これに深い傾斜を伴う薬研彫り手法の彫字がなされていたものとおもわれます。

そこで、試験的にイメージ資料として石膏で薬研彫り式の連彫模型活字を作ってみることにしました。

17世紀の中ごろまで行われてい

た板目材への深い薬研彫りの技法は伝承が途絶えているため、京都市在住の字彫り師・細字常和氏に依頼して6ミリ厚のゴム判を用いた薬研彫りの型取り用父型種字を用意し、これを使って30個ほどの石膏模造品を作りましたが、これは薬研彫りの実際を理解してもらう上で役立ち、重宝しています。(【図2】)

しかし、このような活字模型を作るには父型種字が必要です。

これに対し、今日ではP.Cを利用して平面画像を立体画像に変換し、ディスプレイ上で仮想的に組版を行う方法があり、これについて先の板倉氏が特に頼みテムプロ(大阪市北区)の協力を得て、平面画像からの仮想組版の実現に向けて取り組み中で、目下〈観世流謡曲百番〉の『矢卓鴨』(特製本)の印字データを用いてテストを続けておられます。(【図3】)

嵯峨本の『百人一首』(第1種)が〈観世流謡曲百番〉の特製本の活字を流用して印行されている事実は、すでにこれまでのわれわれの調査で判明しているのですが、近く、その『百人一首』についても全面的な仮想組版を試みたいと考えています。

このように、これからは書誌学の分野でもP.Cをうまく併せて積極利用するようになれば、諸調査にかかる作業時間も大幅に短縮できることになるでしょう。

最後に、文献上でははっきりと確認できることではありませんが、慶長期の中ごろに〈嵯峨本〉の印行をはじめ以前、角倉素庵は一体いつごろから嵯峨の地で印刷事

業に着手していたのでしょうか。

印行地は定かではありませんが、文禄5年に医薬書の『証類備用本草序例』が古活字版で出ています。これは、諸種の事情から判断して、当代きっての名医で知られた吉田宗洵の開版であろうと推察されます。この書物は明版嘉靖本にもとづく明朝体の翻印本ですが、その依拠した明版はおそらく嵯峨の吉田家に伝わる明国から携行した渡来本ではなかったのでしょうか。

それを吉田宗洵の甥にあたる角倉素庵が印行したものとおもわれます。そして、文禄4年の開版かとされている本国寺版の『法華玄義論』や『天台四教義集解』もその使用活字などから素庵がその印行にかかわっているのではないかと考えられます。また慶長3年ごろには儒書の「大学・中庸・孟子」なども嵯峨で印出していたようで、それを入手するために山科言経が摺り代金を叔父の宗洵に託したことが『言経脚記』に記されています。

慶長4年ごろには吉田家と姻戚関係にある曲直瀬玄朔が平仮名交り古活字版の医書『延寿撮要』を開版していますが、これも素庵がその印出にかかわったのではないのでしょうか。

慶長9年刊の『徒然草寿命院抄』は、宗洵の懇友で吉田家と姻戚でもある秦宗巴の撰ですが、これを宗洵が先の文禄活字などを用いて開版してやり、その印出には素庵があたったものとみられます。

このように、角倉素庵は新式の活字版印刷技術が天正期末に伝来するや、いち早くその技法を採り入れ、その直後のところから、叔父の吉田宗洵のアドバイスを受けながら、五山版以来の出版文化の伝統に輝く臨川寺に近接した角倉屋敷において、大々的に印刷事業を起し、以後もこれに積極的に関与してきました。

こうした近世初期における新たな活字出版文化の開発と発展につくした角倉素庵の労苦と偉大な業績を心にとどめ、今回の特別展を機にそれらのことに改めて深く思いをいたしたいものです。

図1 『徒然草』(第1種)



図2 石膏模型



図3 仮想植字

